

第 6 回グリーンエネルギー CO₂削減相当量認証委員会 議事要旨案グリーンエネルギー CO₂削減相当量認証委員会事務局

日 時：平成 25 年 12 月 27 日（金）10：00—12：00

場 所：経済産業省別館 5 階 513 共用会議室

出席委員：山地委員長、秋澤委員、浅野委員、村井委員

1. 挨拶

経済産業省資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部新エネルギー対策課長から挨拶。

2. 委員の紹介

事務局から各委員の紹介。

3. 前回の議事録について

資料 1 の前回の議事要旨案の内容について、異議なく承認。

4. 平成 25 年度グリーンエネルギー CO₂削減計画の認定について

事務局から資料 2-1、2-2、2-3 に基づき説明。平成 25 年度グリーンエネルギー CO₂削減計画の認定について、異議なく承認。

5. 運営規則の改定について

事務局から資料 3-1、3-2 に基づき説明。運営規則の改定案について、異議なく承認。以下、各委員からの発言及び質疑。

（浅野委員）

資料 3-1 において排出係数が有効数字三桁で表示されているが、熱源機器の設備効率に関する記述は、有効数字三桁程度の測定結果が入手可能であるという前提に基づいているのか。

（事務局）

専門委員会では、有効数字に関する議論はなかった。現在市場に出ている代替設備の現状を確認し、その中で保守性の観点から高効率の設備のデータを採用しているため、有効数字が三桁に満たないデータも採用している状況である。

（秋澤委員）三桁目以上は細かすぎるので、有効数字は二桁がいいと思われる。

（事務局）有効数字は二桁として修正する。

（浅野委員）

資料 3-1 の 13 ページに「デフォルト値の見直しについては、原則二年に一回見直しを行うこととする。」とあるが、どのような理由で見直しを二年に一回と設定しているのか。グリーン電力に

関しては年一回行っていると思うが、電力との整合性は取らないのか。

(事務局)

グリーン電力に関しては参考とする数字が毎年更新されているため、年に一回としている。グリーン熱は、技術動向や市場動向を踏まえ体系的に分析する必要があり専門委員会の意見も踏まえて二年に一回と設定している。

(浅野委員)

13ページの移行係数に関して、「2.5年」に関する一文が削除されているが、これまでの議論では「2.5年」というのは暫定的な数字だという形で終わっていたのではないかと。

(事務局)

今年の4月から、J-クレジット制度の運用が開始され2.5年と明確に規定されているため、それに倣った形となっている。

(山地委員長)

J-クレジット制度に関する議論で、マージナルと全電源平均の差があまり見られなくなってきたこともあり、引き続き2.5年とすることに決まった。

(秋澤委員)

「CO₂」の「2」は下付き文字で統一する。

(山地委員長)

この機会に下付き文字にする。

(村井委員)

温水熱を使ったバイナリー発電等の設備認定はどのように行うのか。熱と電力のどちらに申請するのも申請者の自由なのか。

(事務局)

今回の委員会では、既にグリーン熱証書制度で認定された設備によって生成される熱量を対象に、CO₂削減相当量の算定方法を検討することになっている。このため、バイナリー発電に関するグリーン電力と熱の申請方法については、グリーン熱証書制度の認定・認証対象に加わった後に、本制度でも審議することになる。

6. グリーンエネルギーCO₂削減計画認定手続きの変更案について

事務局より資料3-2、3-3に基づき説明。グリーンエネルギーCO₂削減計画認定手続きの変更案について、異議なく承認。以下、各委員からの発言及び質疑。

(山地委員長)

最初に計画申請を行う際、現在は資料2-1の通り「事業の実施期間」と記述しているが、今後はどう変わるのか。

(事務局)

今後は期間を定める必要がないため、様式も変更する必要がある。今回本議題についてご承認いただければ、来年1月以降の計画申請様式を変更させていただきたいと考えている。

(山地委員長)

本制度においては様式の変更に関する手続きの記述はないのか。

(事務局)

様式に関しては、運営規則上は明記されていないため、ホームページ上で様式を変更したことを明記することを考えている。

(山地委員長)

期間を明記できないとしても完全に表記を無くすのではなく、少なくとも「事業開始日から」という表記は必要だろう。

(事務局)

承知した。

7. 今後のスケジュールについて

資料4に基づき、事務局より説明。異議なく承認。

8. その他の論点について

(浅野委員)

グリーン熱の1MJあたりのマーケット価格に関する議論はどのような現状になっているのか。コジェネの電力と熱に関して、どちらをどれだけ割り引くかという評価に直接影響するので、無視できない。グリーン熱はエネルギーの質から考えて、どうしても過大評価になってしまうと考えられるので、割り引く必要があるだろう。

(オブザーバー：グリーンエネルギー認証センター)

グリーン熱証書の価値は、市場のデータがないためグリーン電力証書の値を参考に換算しているが、電力証書に比べて熱証書は適用できる幅が狭いので、多少割り引いていると聞いている。売買実績は少し出ているが、熱に関していくらで売れたというデータに関しては把握していない。グリーン熱証書における値決めは評価の基礎になるため重要な議論であると捉えているが、市場の需要・供給の動きに連動してグリーン熱の値段が大幅に変動する中で、値決めは難しいと考えている。

(山地委員長)

自家消費分のグリーン電力の証書化は進んでいるのか。

(オブザーバー：グリーンエネルギー認証センター)

新規の設備認定に関する申請は、家庭用太陽光以外はない状況。また、FITへの切替をする人が多く、FITの契約を既に済ませ、グリーン電力の契約が終わってからFITに切り替えるという人が多い。

(浅野委員)

今後グリーン熱量が熱源別にどの程度あるのか等を把握していくことで、グリーン熱に関する P R をどのように行っていくべきなのか、といった議論につながるのではないかと。

(岸室長補佐)

方法論の検討が本委員会の本旨であるが、制度としては普及促進を踏まえた情報を整理することも重視していくべきと考える。制度をわかりやすくする工夫や、事業者への PR について今後考えていきたい。

(秋澤委員)

小規模な事業者にとっては申請費用も負担になるだろう。そういう点に対する対策も議論していかなければならない。

以上